

特別寄稿

日本赤十字社史料などのこと —日本赤十字社史料展示室の開設—

田島 弘

日本赤十字社本社図書・資料室のことについては、日本赤十字病院図書室担当者協議会「日赤ライブラリアンニュース」（第4巻第1号、平成9年5月）に、その沿革や現況が吉川龍子氏によって記述、報告された。

特に、そこに「貴重書」の項が設けられ所蔵している資料のいくつかが紹介された。

その後も図書・資料室では、資料の収集と整理保存を積極的にすすめてきた。平成12年4月、これら収蔵されている資料をベースに本社内の一隅に「史料展示室」が開設された。展示室の施設概要は次の通りである。

- 場所 本社西館1階
- 面積 35.475m²
- 展示規模 ★壁面展示 パネル8面
★ケース展示 12ケース 70点
- 開設年月日 平成12年4月3日

また、展示されている史料は、おおよそ年に2回一部を入れ替える。平成13年9月末日現在の展示品の中から主なものを列挙してみる。

- アンリー・デュナン著「UN SOUVENIR DE SOLFERINO」（1862年 パリ）
- 同上書を日本で最初に翻訳出版した「翻聖諾之記念」（明治27年 東京）

TAJIMA Hiroshi

日本赤十字社 企画広報室

- 佐野常民が初めて国際赤十字を見聞した、パリ万国博覧会の案内書（1867年 パリ）
- ジュネーブ条約に加入した政府が初めて作り関係者に配布した「ジュネーブ条約解釈ときあかし」（明治20年）
- 元老院議員佐野常民、同大給恒が征討総督有栖川宮（在熊本）に提出した博愛社設立願書（社則5ヶ条添付）（明治10年）
- 博愛社標識
- 博愛社長崎救護所の薬品等受払い表
- 明治19年設立の博愛社病院建築図と同病院概則



壁面パネルの一部

- 日本赤十字社最初の看護婦養成規則決裁書

(明治 22 年)

- 「日本赤十字社看護学教程」(明治 22 年刊)
・同英語教科書(大正 12 年刊)
- 第 4 回赤十字国際会議(明治 20 年 ドイツ)
に通訳をつとめた陸軍一等軍医 森 林太郎
(後の森鷗外)の議事メモ(直筆)
- 関東大震災関係資料
- 戦時救護活動状況および殉職職員数調書同関係資料
- 日本赤十字社原子力放射能対策委員会刊行
「日本赤十字社原爆病院診療記録全 6 巻」
- 日本赤十字社印章-桐竹鳳凰に赤十字-の制定
決裁書(明治 20 年)
- 明治 36 年 12 月 31 日現在の全国支部社員数
および年酬金集計表
- 赤十字奉仕団設立要綱案(昭和 21 年)
- 青少年赤十字指導情報第 1 号(昭和 23 年)
- 日本赤十字社創立百周年記念関係資料
- ベトナム難民援護事業報告書
- 救護体験記-日航機墜落事後救護記録-
- 阪神・淡路大震災救護記録

日本赤十字社の史料については、明治 44 年初めての社史稿が編纂され現在第 10 巻(自昭和 61 年度 至平成 7 年度)まで刊行されている。

大正 15 年に当時としては画期的な構想の下で、本社構内に参考館(後に博物館および図書館)が開設され多くの文書、写真、物品等が収集され整理保存された。

この博物館と図書館が昭和 38 年に閉館するまで日本赤十字社の歩みを史料として蓄積し、形に残したものは極めて大きく現在の史料の大半はこのときのものである。

なかでも、現存する古い文書、例えば西南戦争時(1877・明治 10 年)における博愛社救護所(熊本、長崎)の記録や博愛社・日本赤十字社初期の文書記録(日誌、年報など)あるいは、社の機関誌ともいえるべき「日本赤十字」-後に「博愛」と改題-は、明治 24 年発行、昭和 26 年終刊まで通巻 740 号その間における本社や地方支部の事業報告、人事往来、表彰記録等が詳細に記されている。今後こうした資料の調査や分析が待たれる。

その後、社屋の建替えなどにより一部の資料が散逸もし、また展示機能も失っていたが、このたびの展示室の開設は、これまでの関係者の深い思いと実際的な努力の結果であろう。

平成 12 年度の展示室見学者数は、6,124 名。今年度から養成研修を終えたボランティアが展示室の案内と説明にあたっている



展示史料室全景